

かたりべ 109

豊島区立郷土資料館だより



『江戸名所図会』に描かれた一枚岩
(神田川河床にはこうした岩盤の露頭が複数あったと思われる。ただし、この絵は豊橋周辺の情景を描いたものではない。)

神田川河床の岩盤露頭の様子
(豊橋から上流方向を望む)



神田川の高田一枚岩

神田川の川底をのぞいたことがありますか？上の写真は都電荒川線早稲田駅からほど近い豊橋の上から上流を撮影したものです。川底が岩盤で覆われているようすがわかります。この岩盤は、堆積岩系の泥岩・凝灰岩質のものであり、軟らかいために表面には重機の爪の痕が生々しく残されています。これは、神田川がしばしば氾濫を起す暴れ川だったため、川底を浚って河床を低くした時の名残りです。水位の低い時期には、岩盤が水面から露出している状況は、豊橋付近から上流の仲之橋付近まで見られますが、そこから上流に向かって高度を下げていき、面影橋付近では水面下に没してしまいます。岩盤の高さは場所によって違いがあり、豊橋～仲之橋付近は高かったのでしょうか。ところで、江戸時代に刊行された『江戸名所図会』に落合の一枚岩が紹介されています(上図)。この岩の上には三人の人物が宴を催す様子が描かれており、かなり広く平坦だったことが窺われます。そして、郷土史家の故岸吉郎さんは、このような一枚岩は、高田と落合の二か所に有ったのではないかと考えています。いずれも近代に入り、流路の付け替えや河川改修工事等により削られたりして失われたのでしょうか、残念ながら現在は、当時の「一枚岩」を見ることはできません。さて、故岸吉郎さんが考えたように高田に一枚岩があり、それが現在の豊橋付近から仲之橋付近の事であったとすると、少し気になる事があります。この部分が、かたりべ一〇六号で紹介した中世高田宿の正面付近にあたるということです。中世には川のすべてに橋が架けられていたわけではなく、歩いて渡れる渡河点があり、そこに「宿」が発達しました。とすると、高田一枚岩が中世の渡河点に足がかりとして活用されており、だからこそ、ここに高田宿が成立したとは考えられないでしょうか。今のところは状況証拠しかありませんが、この謎を解明できる日も近いような気がします。

(橋口)

富士講関係調査2 「高田十三夜講」の足跡 ―御師・大国屋と船津胎内をたどる―

「かたりべ」一〇八号に続き、富士講調査の一端を報告します。豊島区内にあった富士講のうち、高田十三夜元講（ほぼ現在の目白・高田地区の講員で構成）については調査をする機会が少なく、今回、初めて知ることがありました。

では、二〇一二年一月一五・一六日の両日、富士吉田市にある大国屋さん（御師・田辺四郎家）の多大なご理解とご協力を得て行った調査結果を、紙面の限りで紹介します。

■高田十三夜元講の石碑と奉納額

年に一回の富士詣では、どの講中も、泊まる宿が決まっています。そして、

その宿を起点に、富士山およびその周辺の修行の場へ出向きました。高田十三夜元講では、その宿が写真1の大国屋でした。そこは、御師という富士信仰の神職の家であり、また、登拝を案内する強力が近くに住んでいました。

各地の講中は、定宿に、さまざまなのを、寄進しました。大国屋さんの広い庭には、同講が寄進した石碑がありました。それが写真2です。

また、室内には奉納額もありました。その奉納額は（木製・六〇×一八二×四・五cm）、大正一三（一九二四）年に奉納されたもので、次の囲みの中のように文

字が書かれています。当時の講中の講元一名、先達二名、監督一名、世話人四名の氏名が書かれています。なかには、ご自身の先祖の名、親戚の名があるかもしれせん。

大正十三年八月吉祥日

新倉菊蔵	大野勘次郎
鈴木信敬	島田金兵衛
世 渡邊鉄太郎	世 大野市太郎
佐藤善太郎	大野岩吉
醍醐林蔵	醍醐徳太郎
話 福田藤吉	話 田崎三郎
後藤八左衛門	大澤照一
酒井鳥蔵	武藤義治
人 宮川市太	人 高木清次郎
小松豊吉	田島文蔵
新倉安太郎	新倉彦太郎
矢島藤五郎	兜木岩次郎
東 十	講元 吉倉清太郎
先達 金子銀次郎	
京 三	高田元講
夜 先達 大野銀八	
監督 北川寅蔵	
世 尾上留吉	世 澤田孫太郎

字田川紋太郎	西原新吉
加藤市太郎	吉岡秀之助
話 春日六三郎	話 大澤庄太郎
大野福松	市川平次郎
大澤鍋五郎	榎木金蔵
人 田崎鎌太郎	人 島田勝太郎
島田源蔵	中島金次郎
新倉儀太郎	粕谷寅五郎
田崎金太郎	宮城寛太郎
深野留五郎	吉井市郎
奉 綿入三拾枚	講中 御師
納 金壹百圓	一同 田邊眞

■「その名前はわたしの父です」

現在、富士詣を地域の慣行として行っているところは、区内にはないようです。また、かつての経験者もいらつしやらないようです。そのため、どのようなことをしていたのか、知ることはむずかしくなっています。しかし、手がかりが、まったくないというわけではありません。先に示した奉納額内の世話人のなかに、尾上留吉という名前がみられます。そこで、当館に所蔵する書籍から、調べたことを記してみましよう。

その書籍は、「ミミズのひとりごと―尾上多喜雄の自分史(1)―」(二〇〇七年、



写真1 大国屋外観 中央の大きな玄関には注連がめぐらされている。



写真2 寄進された高田十三夜元講の石碑 右には大正14年の刻銘。左には造立年は無いが、講紋により寄進者がわかる。

著者・発行尾上多喜雄)です。一七三頁からなる本書には、昭和八(一九三三)年生れの多喜雄さんの家族・親戚のことはもとより、町会や地域のこと、そして、富士講に関するについても若干ですが記録されています。もちろん、父親のことも触れており、奉納額に記載されている尾上留吉さんが父親であり、奉納額の他の名前にも覚えがあるということを知ることができました。さらに、次の話を直接お聞きしました。多喜雄さんが幼少の頃、自宅(現高田一丁目)の二階の床の間と一〇畳間くらいの座敷は、常にきれいにしており、子どもや家の人たちは、むやみに入ることができなかったということです。それは、その場所で、

富士講のお炊き上げをするからだということでした。一般に、お炊き上げというのは、祭壇を前に、専用の火鉢で線香を焚き、ご詠歌をうたいあげるものといわれています。そして、このようなことは、昭和一八年頃までは行っていたということとです。

父親の留吉さんは、明治二五(一八九二)年生まれで、家業の雑貨商を受け継ぎ、店を閉めた後も、毎晩、曲げ物の仕事をしたり、すだれを編んだりしていたということとです。また、母親のツネさんは、明治三〇年生まれですが、仲人が富士講の仲間であったということも伝えられています。

富士詣では、いくつかの修行がありましたが。お鉢めぐり、お中道、胎内潜り、八海巡り等です。また、雪中を登拝する行もありました。

富士山の山裾には、いくつかの熔岩の洞があり、そのような場所も、行をするところでした。そのひとつが、写真3の船津胎内(山梨県河口湖町)です。当所の本殿左側には、高田十三夜元講が造立した石碑が複数あります。また、拝殿の鴨居には、写真4のような木札が二枚、うちつけられてありました。これからは、豊島区の巣鴨の方の参拝がうかがえます。

胎内を巡るとい行は、身の汚れを払うものといわれていました。この場所の拝殿の一部に洞があり、そこを入ると、

くねくねとしたトンネル状の道が続き、腰をかかめなければ進めないほどになります。ところどころには石像の拝所があり、「父乃胎内」、「母乃胎内」(写真6)、また、「肋骨」という表示もあります。現在は照明が設置されていますが、むかしは、手燭や提灯がなければ到底進めず、暗いなか、恐怖心もあつた行であつたことと想像されました。

現在、地域の慣行としての富士講はなくなっていますが、資料館や講中の定宿には、ゆかりのものが、歴史を伝える資料として遺されています。大国屋さんでは、高田十三夜元講が寄進したマネキや布団等を毎年九月になると、虫干しをし大切に保管されておられるとうかがいました。こうした努力があつて、当区の歴史が遠隔地に遺されているのです。

高田一丁目の富士見坂からは、富士山がよく見えます。地域の人々はどのような気持ちで富士山を詠め、どのような行程で参拝したのでしょうか。遠隔地に遺るものから地元の歴史を知る機会になりました。

(福岡)



写真3 船津胎内 本殿全景。高田十三夜元講の講祖高田藤四郎が発見した。



写真4 船津胎内拝殿の鴨居 右の木札には「巣鴨大根原 身禄」、左の木札には「巣鴨 四 蔭平」と書かれてある。年月日は見当たらなかった。



写真5 母の胎内 船津胎内の石柱の表示。右上方が進路である。

セピア色の記憶

第30回 あなたはソメイヨシノが好きですか？

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した駒込西福寺（豊島区駒込六―一二）前の様子です。上写真は一九八四年の春に撮影したソメイヨシノ満開時のもの、下写真は最近撮影したソメイヨシノ開花前（二〇一三年三月撮影）のものです。地図に示した*印は撮影地点を、↓印は撮影方向を示しています。

一般にソメイヨシノは成長が早いと言われていますが、確かにこの三〇年間で木の幹が明らかに太くなり、道路へのせり出し具合も大きくなっているため、向かい側の桜並木とともに、今や満開時には「ソメイヨシノのトンネル」状態です。

読者の皆さまの中にはご存じの方も多々と思いますが、この地はソメイヨシノが誕生した場所と考えられています。江戸時代には現在の豊島区駒込三―七丁目一帯は染井（村）と呼ばれていました。そして、現在の駒込駅方面から都営染井霊園へと一直線に続く染井通りの北側部分には、多くの植木屋たちが住み、植木や鉢植えを栽培・販売していました。万延元（一八六〇）年に来日したイギリスの植物学者ロバート・フォーチュンは、「私は世界のどこへ行っても、こんなに大規模に、売物の植物を栽培しているのを見たことがない。」と、自身の日本と

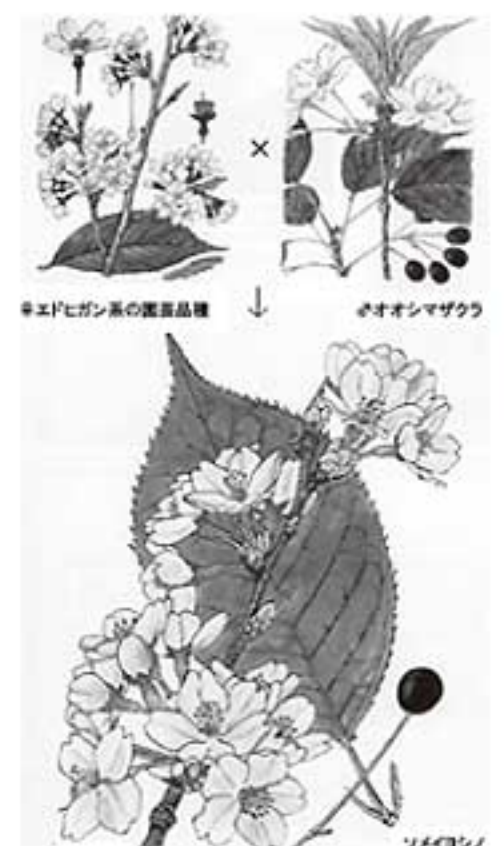
中国での滞在記『江戸と北京』に記しています。

さて、ソメイヨシノは、江戸時代後半から明治初年の間に染井の植木屋が全国に売り出した桜の一品種とされています。植物学者として有名な牧野富太郎は、『原色牧野植物大図鑑』の「ソメイヨシノ」の項で、「（前略）和名は江戸末期、東京染井村（現在の駒込）の植木屋からひろまって、桜の名所になぞって単に吉野と呼んでいたが、吉野の山桜と混同するの

で明治五年に染井吉野と名がついた。」と述べています。



ソメイヨシノ交配図



明治三三（一九一〇）年に上野公園の桜調査報告「上野公園桜花ノ種類」で藤野寄命が初めて用い、翌三四年に植物学者の松村任三が *Prunus Yedoensis Matsumura*（プルヌス・エドエンシス・マツムラ）という学名を与えたというのが真相のようです。うですが、いずれにせよその起源については染井の植木屋との関連性が指摘されており、染井（村）つまり現在の駒込がソメイヨシノ発祥の地と言ってよいでしょう。

また、ソメイヨシノは取り木や接ぎ木によってふやしていくため、すべての樹木が同じ性質を持つクローン植物です。つまり、同一の環境下では同じように成長し、芽吹き、開花し、散っていくわけですから、桜の開花前になるとテレビの報道番組等で使用される「桜前線」という用語や、地域ごとの満開情報の提供は、ソメイヨシノがクローン植物であるからこそ可能なのです。

（秋山）

二〇二二年度冬の收藏資料展報告「江戸の玩具と子どもがんぐの世界」

この度の冬の收藏資料展では、「江戸の玩具と子どもの世界」というテーマのもと、豊島区内各地の遺跡から出土した江戸時代の玩具を紹介しました。

当時の子どもたちも、現代と同じように様々な遊びを楽しんでいましたが、特に江戸時代は、「商品」としての玩具が生産されるようになったという点で、子

どもの遊びの歴史の中の画期であるといえます。こうして子どもたちは手作りの玩具だけではなく、大人が買い与えた玩具で遊ぶようになったのです。

豊島区内の遺跡から出土する玩具には、土製のままごと道具や泥面子どろめんこ、人形、箱庭道具などがあり、これらの土製玩具の多くが、江戸時代中期（18世紀後半）以

降の遺構から出土しています。今回の展示では、遺跡から出土した土製玩具のうち、ままごと遊びの主役となった小さな食器や調理器具、泥面子や土玉どたまなど「打つ」遊びに使う玩具、そして様々な御利益をもつ土人形を紹介しました。

これらの玩具を一つ一つ丁寧に観察すると、とても精巧に作られていることがわかります。例えば、ま

で細工が施されています。また、泥面子や型抜き遊びの面模めんがたは、思わず収集したくなってしまいうほど豊富なモチーフがあります。土人形たちも、愛嬌のある表情を浮かべています。展示では、土製玩具の見どころをわかりやすく伝えるため、いくつかの展示品の細部を間近で撮影し、デジタルフォトフレームで紹介しました。

こうした玩具の普及の背景には、「子ども」に対する人々の態度の変化があります。江戸時代半ばになると、「家」の継続や繁栄のため、子育てへの関心が高まり、庶民の間にも育児書が普及しました。また、諸藩で捨子対策すてこが整備され、



写真1 ままごと道具



写真2 人形



写真3 泥めんこ

まごと道具は、実生活で使われた食器や調理器具に似せて、細かい部分ま

子どもの保護に力が入られるようになります。商品としての玩具の普及も、子どもへの関心の高まりを象徴する現象であるといえるでしょう。遺跡から出土する玩具は非常に小さなものですが、そこから大きな歴史の流れを垣間見ることができ

るのです。
(としま遺跡調査会・
中山なな)

新連載「絵はがきは語る」(5) 鬼子母神遊園地

豊島区の桜の名所といえは、ソメイヨシノ発祥の地とされる駒込が有名ですが、雑司が谷の法明寺境内の桜のトンネルも大変見事です。法明寺の桜は、絵巻物『武蔵国雑司谷八境』に「威光山花・法明寺」として紹介され、江戸中期には桜の名所となっていました。明治時代に入ると、法明寺と鬼子母神堂との参道間に新たな桜の名所が誕生します。明治四〇



「威光山法明寺全景図」(部分) 明治40年10月版
中央に「遊園地」、その上の参道沿いに茶店「大沢屋」、右側には通称「丸猫の池」、弦巻川を渡ると仁王門が建っている。



雑司ヶ谷鬼子母神遊園地

絵はがき「雑司ヶ谷鬼子母神遊園地」

へ一九〇七年一〇月版「威光山法明寺全景図」を見ると「遊園地」があり、桜が数十本描かれています。開設時期など詳細は不明ですが、今と違って遊具はなく、花見を楽しむ公園として開放されたようです。この遊園地を写した大正初期頃の絵はがきが一枚残されています。参拝記念絵葉書セットの一枚と思われますが、大木の桜(ソメイヨシノでしか)の間に若木が植えられ、着物姿の大人と子どもが園内を散策しています。

大正七年から昭和八年まで幼少年期を

雑司が谷で過ごした中村省三氏(大正五年生れ)は、「鬼子母神堂下の題目碑」を左に道なりに行けば、鬼子母神の奥の院である威光山法明寺へ行く参道なので、昔はその石段を降りた左角には名物の茶店、右側は道路をへだててかなりの空地があり、秋のお会式には必ずサーカスの小屋掛けができた場所だった。後にその空地には高田会館(のち鬼子母神会館)という、今という市民会館のようなものが出来たが、その桜がまた見事で、よく夜桜見物に行ったものである。：左角の茶店(大沢屋)は味噌田楽が名物で、秋十月のお会式には万灯を振りかざし、うちわ太鼓を叩く講中連の休み場所でもあった。：赤い仁王門と、その前を流れる小川(弦巻川)―それはまことに絵にしたようで、よく映画の撮影に使用された」と当時の賑わいを語っています(「雑司ヶ谷界限」一九七七年。カッコ内は筆者注)。中村氏が空地と記した場所が遊園地のこと、参詣客や地元住民はここで花見を楽しんだことでしょう。その後、この地に鬼子母神病院が開設され、現在は東京音楽大学の校舎となっています。

(横山)

編集後記

煩惱の数をのりこえて、ここに「かたりべ一〇九号」をお届けいたします。一九八五年一月に創刊してから二七年四カ月をかけてようやく到達することができました。

ところで、前号(一〇八号)一頁に訂正がございました。上段五行目の「豊島区が誕生した昭和八：」を「豊島区が誕生した翌年の昭和八：」に訂正をお願いいたします。充分注意を払って校正をしたつもりでしたが、見落としていました。編集担当のミスであり、深くお詫び申し上げます。今後はこのようなことのないよう一層の注意を払ってまいります。

さて、今年の春は少し駆け足でやってきているようですね。とはいえ、朝夕の温度差はまだあります。健康には充分ご留意下さい。(は)

かたりべ
No.109

2013年3月31日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4
豊島区立勤労福祉会館7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan/>